第１回（８月）　会議録（主な意見）

〇夏休みなどの長期休暇には、公民館で子どもの居場所づくりを行っている。約１５名の地域住民や各種団体の方が先生となり、集まってきた子供たちに、宿題だけでなく、自然のものを使った工作をしたり、子どもたちの遊びの見守りをしたりしている。この活動をとおして、親が不在で学童にも通っていない子どもの受け皿の必要性を感じた。また、学校運営協議会が子どもの現状を伝える機会となったらよい。

〇県内各所で学校の統廃合が進み、公民館のあり方や地域の活性化のために公民館を運営する側も知恵を絞っている。一方で地域住民のつながりも希薄となっており、地域の行事をきっかけに地域のウェルビーイングについて話し合っていきたい。また、近年、学校のＰＴＡも自由参加の風潮があり、同じく子ども会の役をやりたがらない親が増え、人付き合いの大切さやモラルについて語り伝えていく必要を感じている。

〇自分が所属する団体では、年に１回県内の小学生を対象に宿泊体験事業を行っている。県内各所を会場に行ってきたことで、その地区の祭りや伝統文化が体験できるよさと、事業をとおして大人のつながりも生まれている。また事業を１０年続けてきたことで、参加した子どもが指導者となって協力してくれる事例も出てきた。しかし、子供たちを参加させることに不安を感じている保護者もあり、安心して子どもを預けられる環境づくりが大切である。

〇地元には江戸時代から伝わる民話や多くの神社・お寺があり、歴史的な遺産が豊富な地域である。そこでおじいちゃんから聞いたお話に、婦人会で絵を加えて紙芝居にして子供たちに伝える活動を行っている。年に１回の活動ではあるが、先生方も知らない地域に伝わる歴史や文化を子供たちに伝える貴重な時間だと思っている。地域住民を地域の先生としてもっと活躍していけたらよい。

〇自分の町では、小中学校ともに「町の先生」という制度があり、約２０年に渡って、３０名ほどの地域住民が参画している。町の先生のよいところは、学習に限らず、地域のことをよく知っている住民が、ゲストとして学校で話をすると子供たちが高い興味関心をもって話を聞けることです。また、定年退職を迎えた住民にとっても、自分の知恵や技能が役立ち、生きがいを感じられる機会となっている。